



## IV. 教育アセスメント

### 1. 全学関連

教育アセスメント室では、特定の授業や教育プログラム、個別部局のアセスメント関連の支援業務に加えて、全学的なアセスメント・評価業務にも携わっています。特に、2019年度は認証評価の受審に伴い、大学評価委員会委員として、また、教育アセスメント室として、関連する評価業務に様々な形で関わりました。他にも、法人評価や教育IR推進室に設置されたアンケート検討部会などにも携わっています。

教育アセスメントや評価に関連した取組の推進が求められる中、マクロレベルからミクロレベルまで幅広い支援を行うことが出来ればと思います。

(山田 剛史)

### 2. 医学部との連携

2016年度より、医学教育の推進に特化した医学教育・国際化推進センターと、特定の分野に限定しない形で教育改善支援を行う本センターとが、お互い持つ知識やリソースを提供・共有できるような懇談の場を設けて、様々な話題について情報交換(懇談会)を行ってきました。

2018年度は、こうした関係性を基盤に、医学部教学IR(Institutional Research)の試行的運用に着手しました。医学教育・国際化推進センターと医学部教務課、全学支援組織である教育推進・学生支援部教務企画課教育情報推進室と本センター教育アセスメント室の4者が協働して、医学部における教学IRの取組を進めてきました。

2019年度は、医学研究科における研究科長裁量経費「京都大学医学部における医学教育記録・紹介事業」の協力部局として、卒業生へのインタビューを通じた教育の質の評価に関する取組を支援しています。

この間進めてきた取組(知見やノウハウ)は、他部局でも展開可能なものです。全学支援部署の1つとして、他部局での支援にもつなげていきたいと思っています。

(山田 剛史・勝間 理沙)

### 3. 教育学部との連携(体系的なアセスメントの推進)

2016年度より、教育アセスメント室では、教育学部における教育の内部質保証および向上支援を行ってきました。主に、以下のよう形で支援を行っています。

#### (1) 独自の学生調査を核とした組織的な教育改善支援

最初に着手したのが、2016年度からリニューアルされた初年次必修専門科目「教育研究入門Ⅰ・Ⅱ」(前期・後期)の効果検証を行うための学生調査(質的・量的)の開発でした。2016年度以降、前期の授業開始時、前期の授業終了時、そして後期の授業終了時の3地点で調査を実施し、学生の学習実態を把握するとともに、効果検証の結果を踏まえて当該授業の改善支援を行っています。

また、当該調査には、部局のディプロマ・ポリシー(DP)の項目を盛り込んでおり、さらに高年次対象の調査や卒業時・修了時の調査も導入し、入学から卒業・修了まで一貫した学生調査を開発・実施しています。

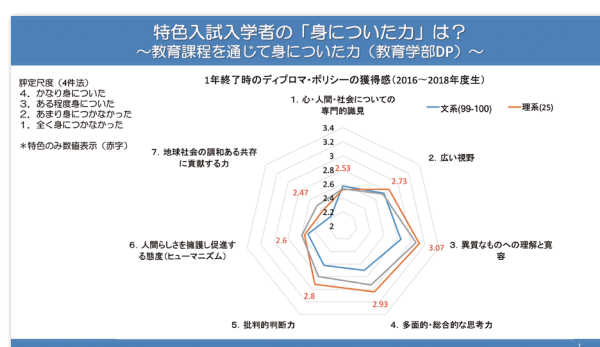
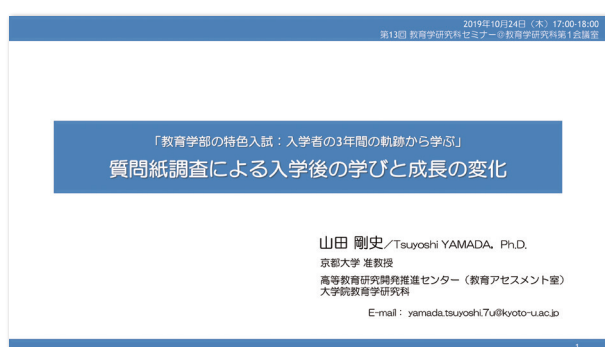
#### (2) 特色入試入学者を対象とした追跡調査の支援

学部内に設置した特色入試追跡調査ワーキンググループのメンバーとして、特色入試入学者に対するインタビュー調査の実施と分析に携わっています。加えて、上記のアセスメントの分析結果も踏まえつつ、特色入試の効果検証の支援を行っています。

#### (3) アセスメント結果のフィードバックによる内部質保証の支援

上記のアセスメントによって得られたデータ分析の結果は、教育研究入門の担当教員や教育学研究科セミナー(研究科全体のFD)の場で毎年報告し、改善につなげています。2019年10月24日に開催された当セミナー「教育学部の特色入試:入学者の3年間の軌跡から学ぶ」では、過去3年間のアンケート調査のデータ分析に加え、GPAや修得単位数などの教務データの分析も行い、特色入試の有効性について検証・報告を行いました。これら一連のPDCAサイクル(内部質保証)は、当該研究科の教務委員会や自己点検・評価委員会等と連携しながら進めています。

当該部局での支援活動は、他部局においても効果的な教育改善のモデルになり得ると考えています。



(山田 剛史・勝間 理沙)

## 4. MOOC・SPOCのアセスメント

教育アセスメント室では、京都大学が提供するMOOC・SPOCについて、次の目的のためにアセスメントを行っています。

- ①今後のコース改善のため
- ②学内での普及・拡充のため

### (1) コースレポートの作成とフィードバック

MOOC・SPOCのいずれのコースにおいても、各講義配信終了後、講義に関わるさまざまなデータを収集し、今後の講義の改善に役立つ調査研究を行っております。

#### ①MOOCのコースレポートの内容

MOOCにおいては、そのプラットフォームであるedXから、受講者情報（年齢、性別、最終学歴、地理的情報など）や、また課題への取り組みや講義ビデオの視聴の様子といった学習者の学習履歴が提供されます。さらに、それらの情報とは別に、SurveyMonkeyを利用して、講義受講前後の情報（受講動機、事前の知識、満足度、事後のコメントなど）をオンラインアンケートから独自に収集しています。それらの情報を集計分析し、コースレポートを作成します（図1、表1）。

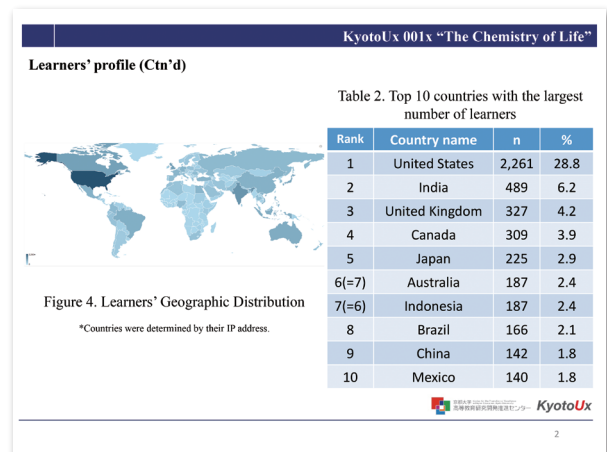


図1 コースレポートの例(地理的情報)

表1 コースレポートの構成	
コースの基本情報	タイトル、担当教員名、開講期間
レポートの要約	コースレポートの内容を1ページに要約したもの
学習者の人口統計学的指標	性別、年齢、最終学歴、地理的情報
学習者の成績情報	登録者数における成績内訳、分布
行動ログに基づく集計	課題への取り組み、ビデオの視聴状況
前後のアンケートデータの集計	受講動機、MOOCの事前経験、事前知識、満足度
受講者からのコメント	コースの改善や感想などを一覧にまとめたもの

さらに、開講回数が5回となったコースについては、登録者属性について追加分析を行い、5回分の推移を別途報告しました（図2）。

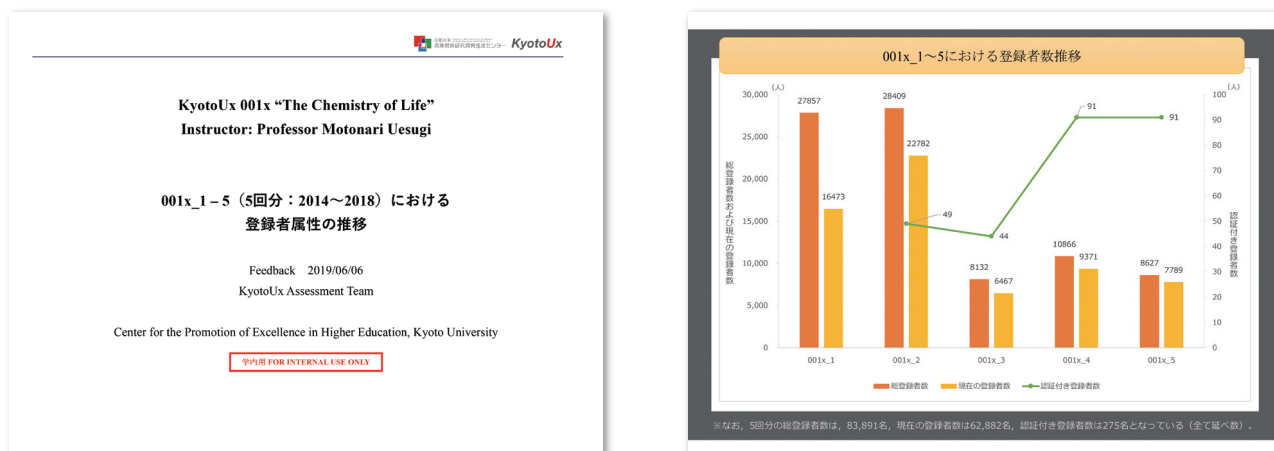


図2 追加分析のレポート例(左:表紙、右:001x\_1~5における登録者推移)

### ②SPOCのコースレポートの内容

SPOCにおいても、MOOCと同様の情報をOpen edXのInsightsから得ることが可能です。しかし、SPOCにおいては、例えば、一般人向けに作成されたものから、学内の授業と連動して(反転授業のように)使用されるものまでさまざま、その用途や人数はMOOCとは大きく異なります。そのため、MOOCのみならず、SPOCのコース間でもそれぞれのコースに合わせた集計や分析を行っています(例えば、図3)。

DS001 “オオサンショウウオ先生の医療統計セミナー—臨床試験・メタアナリシス・疫学研究—”	DS003 “臨床試験”
目次	目次
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 授業の概要 (表1)</li> <li>■ 受講生について (表2)</li> <li>■ 事前アンケートの結果 <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 受講の動機 (図1)</li> <li>✓ 受講生の専門分野 (図2)</li> </ul> </li> <li>■ 事後アンケートの結果 <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ オンライン講義の満足度 (図3)</li> <li>✓ 講義のキャリア活用についての期待 (図4)</li> <li>✓ 受講生の全体的な感想や意見 (表3)</li> </ul> </li> <li>■ 事前・事後アンケート両者からの結果 <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 受講生の関心・意欲 (図5)</li> <li>✓ 受講生の知識 (図6)</li> </ul> </li> <li>■ レビュー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 授業の概要 (表1)</li> <li>■ 受講者について (表2)</li> <li>■ 事後調査の結果 <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 受講者の関心・意欲 (図1)</li> <li>✓ 受講者の知識 (図2)</li> <li>✓ オンライン講義の満足度 (図3)</li> <li>✓ 受講生の全体的な感想や意見 (表3)</li> <li>✓ 対面授業の受講の有無 (図4)</li> <li>✓ 予復習の時間 (図5)</li> <li>✓ 到達目標①に対する効果の認識 (図6)</li> <li>✓ 到達目標②に対する効果の認識 (図7)</li> <li>✓ 授業デザインへの満足度とその理由 (図8, 表4)</li> </ul> </li> <li>■ レビュー</li> </ul>

図3 同様の教員におけるコースレポートの目次(左:一般向け、右:学内向け)

### ③各コースレポートのフィードバック

作成されたコースレポートは、制作チームと合同で、基本的には対面でフィードバックを行っています。ただし、再開講のコースであったり、担当教員との都合がつかなくなったり等で、対面でのフィードバックがかなわない場合もあります。そのため、2019年度からは「リフレクション・サーベイ」を導入しました。これは、これまで行われていた対面でのフィードバックには、コース改善に資する議論を行ったり、教員へのリフレクションを促したりするなどの効果があることを実感しており、それと同様の効果を得るためのものです。対面でのフィードバックがかなわない場合は、作成されたコースレポートとともに、サーベイのURLを担当教員へ同送しています。

2019年度は、MOOCでは対面で3名、メールでの送付を6名に、SPOCでは対面で2名(1名は2コース分)、メールでの送付を1名(2コース分)に、コースレポートのフィードバックを行うことができました。リフレクション・サーベイについては、実際に「登録者が少ないのもっと宣伝すべき」、「教育効果についてはオンラインでは限界がある」等のコメントをいただき、フィードバックによる先生方の授業へのリフレクションや改善への動機づけを高めることができたようです。

## (2) AXIES2019での発表

これまでのMOOC・SPOCでの取り組みについて、「MOOC・SPOCを核とした持続的な教育改善・質的向上をどう実現するか」と題して、「AXIES2019(大学ICT推進協議会)」(2019年12月12日)にて発表しました。この発表は制作チームと連名で行われました。

発表内容としては、MOOC・SPOCの特徴から、その展開、MOOCが与える受講生へのインパクト(受講生情報や教員インタビュー)、持続的な教育改善・質的向上のための効果的な取り組みについて扱われました。SPOCについては、要旨の紙面、発表時間の短さで十分に取上げられませんでした。フロアからは、SPOCに対する期待が寄せられ、今後の活動を考える上で、重要な示唆が得られました。



## (3) 今後の発展に向けた活動

### ① “Hawk eye system”の試行とMOOCデータ取得の効率化

先のAXIES2019での発表準備時に、MOOCデータを集計分析する過程で、そのデータ取得の複雑さが課題となりました(例えば、各種データのIDでの紐付け等)。今年度、これについて今後改善されていく動きが2つあります。その1つが、前年度から取り組んでいる“Hawk eye system”が試行段階となったことです。これはMOOCについての情報を一望できるマネジメントシステムであり、視覚的にMOOCの現状をリアルタイムで把握することができます。また、もう1つの取り組みは、MOOCデータ取得の効率化です。こちらも制作チームとの議論を経て、今年度中に実現する予定です。

### ② SPOCアセスメントの類型化の試み

先に述べた通り、SPOCは、MOOCのように世界中の大規模で多様な学習者を対象とするものだけでなく、さまざまな対象者を範疇としており、またいずれも小規模を対象とするため、その教育効果が期待されています。そのため、それぞれのアセスメントを効率よく進めていくため、どのような集団を対象とするのか、短期or長期的に施行されるのか、正課運動型or生涯学習型かなどの指標をもとに、類型化していく試みが進められています。

(勝間 理沙・山田 剛史)